

アマデウス通信

(制作・著作) 日本モーツァルト愛好会
〒152-0022 東京都目黒区柿の木坂2-22-23
朝吹 英和 方
TEL&FAX 03-3725-7179

2018.05.20 No. 49



礒山雅先生を偲んで

K.450 宮田 宗雄

バッハ研究の第一人者であり、モーツァルトをこよなく愛していた礒山雅先生が不慮の事故によって2月22日、帰らぬ人となってしまいました。多くの著書や訳書を出され、また様々な講演会などを通じて、多くの人に多大な影響を与えていただけに、その突然の死は大きなショックと深い悲しみをもたらしました。

礒山先生の優しい語り口と鋭い切り口でのお話しは、我が愛好会に於いても人気の高い講演者のお一人でした。ご承知の通り、愛好会に於いて、一昨年(2016年)の7月に続いて、今年の7月もご講演をさせていただくことになりました。礒山先生としましても、まだまだやり残したことがあるのではないのでしょうか。さぞご無念だったと思います。礒山先生からもっともっとモーツァルトのことを学びたかったと思うのは、私だけではないでしょう。

一昨年でしたか、日本モーツァルト協会主催の礒山先生の講演会に何人かの愛好会のメンバーとご一緒しましたが、N氏の発案で礒山先生とご一緒に会食してはどうかとのことになりました。当然、モーツァルト協会の方で予定が組まれていると思ったのですが、それはなく、私たちの急なお声掛けにも拘らず気軽に応じていただきました。その時、小生の会員番号(K.450)の作品についてその印象をお尋ねしたところ、「それは素晴らしい作

品です。良い曲を選択しましたね」と言っていただき、我が意を得たりという気持ちになりました。また一昨年(2016年)の愛好会の講演の後の懇親会では、ご自身で各テーブルに出向いてお酌をしながら、にこやかに多くの会員との会話を楽しんでいたことが思い出されました。そんな優しい、人懐っこい人でした。また昨年(2017年)はご縁があつて愛好会の何人かのメンバーとご一緒に礒山先生を囲んでの会食する機会に恵まれました。ワインとお喋りが好きな気さくで人間味のあるお人柄でした。

今、断捨離をしています。その過程で礒山先生ご出演の懐かしいプログラムが出てきました。それは、1991年11月30日、立教学院聖パウロ礼拝堂で行われた立教大学新座キャンパス公開講座で「バッハとキリスト教」というタイトルの新座市民のためのレクチャー・コンサートでした。その年は愛好会に入会した年であり、新座市民だったこともあり受講することにしたのでした。当時、国立音楽大学の助教授であった礒山雅先生の講話、パイプオルガンの演奏は立教大学教授の高橋秀先生、指揮は国立音楽大学助教授の佐伯武先生、そして演奏はセントポールズチャペルコンサートでした。演奏曲目は、モーツァルト：アイネ・クライネ・ナハトムジーク K.525、マルチェッロ：オーボエ協奏曲、ヘンデル：オルガン協奏曲第10番、そしてバッハ：カンタータ第61番でした。バッハの演奏の前に、礒山先生の講話がありましたが、その時の印象的な言葉は今でも覚えています。バッハとモーツァルトの違いを説明されたもので「バッハは構えて聴く必要があるが、モーツァル

トは気楽に“ながら”で聴ける。しかし、音楽の中身はととても深いものがある」というようなお話でした。それ以来、モーツァルトの音楽を気楽に楽しく聴けるようになった気がします。

モーツァルト没後 200 年記念行事の一環として世界のモーツァルト研究家が国立音楽大学に一堂に会して行われた 1991 国際モーツァルト・シンポジウム（1991 年 11 月 18 日～20 日）に参加しましたが、礒山先生は、そのシンポジウムの実行委員会委員長としてシンポジウム委員長の海老沢敏先生を甲斐甲斐しく支えていたのを覚えています。

礒山先生の愛好会での講演実績を辿ってみますと・・・

- ① 第 266 回例会（2001 年 12 月 20 日）
「やけに音符が多いね。モーツァルト君」
～モーツァルト様式の個性を探る～
 - ② 第 275 回例会（2002 年 9 月 29 日）
「モーツァルトと聖母マリア」
 - ③ 第 289 回例会（2003 年 11 月 16 日）
「ザスラウ著《モーツァルトのシンフォニー》の翻訳を終えて」
 - ④ 第 440 回例会（2016 年 7 月 23 日）
「モーツァルトはヘンデルから何を学んだか」
- *第 465 回例会（2018 年 7 月 21 日）
「三大交響曲の構想を解剖する」は幻の講演会になってしまいましたが、愛好会の会員にどんなことを伝えたかったのでしょうか。

礒山先生はご自身の著書の中で「モーツァルトを聴いている限り、人は世をはかなむ必要はない。モーツァルトの音楽は何時も人に生きていて良かった、人間であって良かったというメッセージを語ってくれるのである」と述べられていますが、愛好会の講演実績からもわかるように、愛好会にとって掛け替えない講師であり、ましてや同世代であるこ

ともあり、そんな親しみを感じる大切な人を失い、人の世のはかなさを感じないわけにはいきません。

最後に生前のご指導ご厚誼に感謝し、慎んで故人のご冥福をお祈りしたいと思います。

（合掌）



「神ってるモーツァルト」Ⅲ

K.425 朝吹 英和

【自由】Ⅰ

クラリネット協奏曲イ長調 K. 622 の第 3 楽章では只管流れ行く雲や水の如き自然な変化と自由自在な律動に満ちた時空が展開します。

この秋は何で年寄る雲に鳥 芭蕉

空に浮かぶ雲や鳥のように重さの感じられない軽味の世界。モーツァルトが作曲した 1791 年 10 月のウィーンの空と、約 100 年前の 1694 年 9 月に芭蕉が見上げた日本の秋の空には何処か通底するものがあります。旅を創造の源泉としたモーツァルトと芭蕉。いずれの作品も死の 2 か月前に作られたのも不思議な符合です。

スタッカートによる躍動感溢れる Rond 主題には全ての柵から解放された自由が実感され、そのような自由は自然や生命の本質を形成する無名性や循環律を内包しています。貴族社会から市民社会への移行期に誕生したモーツァルトは自立した精神の持ち主であり、あらゆる束縛や権力に反抗しました。隷属を強制された宮廷は勿論の事、最愛の父に対してさえ精神的な自立と共に葛藤しつつも距離を置き始めて抵抗した事が手紙のやり取りから窺えます。

時間の流れの中で自由自在に繰り返される音楽には「終わりの中に内包された始まり」を感じ取る事が出来ます。

「理想は自由をしばしば抑圧するが、理想を抱かなかつたモーツァルトは、自由という言葉に最も深い意味をあたえることができた」（遠山一行）

【自由】Ⅱ

父の支配下から離脱して1781年3月ウィーンに赴いたモーツァルトはすっかりウィーンが気に入って交際範囲も広がっていったようです。翌1782年の7月にはオペラ『後宮からの誘拐』K. 384が大成功を納め、8月には交際を深めていたコンスタンツェと結婚式を挙げました。

ミサ曲ハ短調 K. 427、交響曲第35番ニ長調 K. 385、弦楽四重奏曲ト長調 K. 387を始めとするハイドンセット、交響曲第36番ハ長調 K. 425等の傑作が誕生した正に「人生右肩上がり」の時期でした。

ピアノ協奏曲第15番変ロ長調 K. 450は、新妻コンスタンツェを伴い充実した創作活動を展開していた1784年5月に誕生しました。珠玉の傑作揃いのモーツァルトのピアノ協奏曲は、どの曲にも魅惑的な旋律や和声が充溢しており聴くたびに新しい発見があります。

この曲は突如オーボエとファゴットのユニゾンで開始されますが、「ひと汗かかせる協奏曲だと思います」（1784年5月26日付父宛ての手紙）とモーツァルトが述べているように付点リズムやトリルの多用、最高音から最低音まで幅広い音域を駆使して華麗に展開されるピアノリズム、管楽器の有機かつ効果的な使用により充実した管弦楽との対話など、一段とスケールアップした光彩陸離たる音楽が溢れています。

ピアノ作品などを中心として変奏曲を得意としていたモーツァルトは第2楽章でピアノ

協奏曲としては初めて変奏曲のスタイルを採用しています。内省的なピアノのモノローグ。やがて装飾的な進行を見せるピアノの背景に明滅する木管楽器の光にはモーツァルト独特の味わいがあります。

第3楽章の快活なロンド主題には既に晩年のピアノ協奏曲第27番変ロ長調 K. 595の原型が透けて見えるようですし、より一層の躍動感を加味すればピアノ協奏曲第22番変ホ長調 K. 482の第3楽章のステージとも通底しているように感じます。

先行する2つの楽章では敢えて沈黙を守っていたフルートが他の木管楽器とのユニゾンでその存在を幽かに示し、やがてピアノと共に登場して視界を一気に広げます。魅力的なフルートとピアノの掛けあい（100小節～106小節）、一本のフルートが加わるだけで厚味を増す管弦楽の響き。ある時は弦楽器とまたある時は管楽器との対話をと目まぐるしく動き回るピアノ。

「ひと汗かかせる」とは高度なピアノの演奏技法に加えて他の弦楽器や管楽器との対話にも心配りが必要なピアニストへの要求水準の高さを示唆しているのだと思います。

第3楽章を聴く度に、私は「フィガロの結婚」を一貫して流れる有機的的肉体感を伴った音楽が想起され、スキップするスザンナの姿が目には浮かびます。聴覚の世界から視覚の世界へと一気に転位する事もモーツァルトの魅力の一つではないでしょうか。

「神ってるモーツァルト」の瞬間が結晶したピアノ協奏曲第15番の実演に私が初めて接したのは、52年も前の1966年3月でした。イングリット・ヘブラーの独奏、岩城宏之指揮によるN響（コンサートマスターは海野義雄）の特別演奏会でした。そして半世紀以上のブランクを経て2017年11月に聴いた小倉貴久子さんの演奏が2回目でした。ピアノ協奏曲第15番との不思議な「ご縁」を感じています。

【香り立つ瞬間】

嗅覚は視覚や聴覚よりも記憶を呼び起こす作用が強いとされており、五感の中でも不思議な世界を創造します。また、視覚や聴覚との相互作用もあると聞きます。

「香り」と一口に言っても「香気」、「清香」、「微香」、「暗香」（何処からともなく漂う花の香等）、「献香」（神仏に捧げる香）、「霊香」（神秘的な香）、「色香」等様々な言葉で表記されるように幅広い領域が存在しています。

本来「香り」は鼻で感知する嗅覚ですが、耳で聴く音楽から「香り」を感じ取る事が出来たり、鮮やかな色彩の絵画からも良い香りが漂って来たりと、五感の相互作用についての研究も進んでいるそうです。

ヴァイオリン・ソナタ変ロ長調 K. 378 の明るく優美な旋律を耳にする時、私は芳しい花の香りに満たされてゆくような幸福感を味わいます。また、フルート四重奏曲ニ長調 K. 285 を開くフルートの爽やかな響きに接すると何処からともなく柑橘系の仄かな香りが漂って来るような気分になります。

更に、パリ滞在中にド・ギーヌ公爵の依頼で作曲されたフルートとハープのための協奏曲ハ長調 K. 299 は光輝く宝石箱をひっくり返したような色彩溢れる情景が目に見えかぶると同時に、18世紀のフランスのサロンへタイムスリップする思いが膨らむのか、賑やかなサロンで談笑する貴婦人達の脂粉の香りまでも想像出来るような気がします。

弦楽四重奏曲第17番変ロ長調 K. 458 を聴くと爽やかな朝の高原の空気のような香りに包まれます。弾むような第1楽章第1主題の躍動感のなせる業かも知れませんが、第4楽章のアレグロ・アッサイの澁刺とした響きにも同じような香りを感じます。

「女の匂いがする」（ドン・ジョヴァンニ）
「おや、良く効く鼻だ」（レポレロ）

モーツァルトのオペラに登場するキャラクターは様々ですが、清純な乙女から熟年の女性まで魅力的な人物の醸し出す個性豊かな「香り」もオペラを聴く（観る）楽しみの一つです。清らかな色香から濃密な官能の極致まで「香り」の態様も色々で枚挙に暇がありません。

『ドン・ジョヴァンニ』の終盤、最後の晩餐となるとは露知らず料理やワインを楽しんでいたドン・ジョヴァンニの館に興奮したエルヴィラが駆け込んで来ます。

「私の悲しみを笑わないで」と必死に改心を迫るエルヴィラに対するドン・ジョヴァンニの答えは「食事をさせてくれ。良かったら一緒にどうだ」というつれないものでした。絶望したエルヴィラが「もう勝手にするがいいわ、悪者め」と言い置くや、「女性のために乾杯だ！美酒に乾杯！人間の糧と栄光だ！」と人生を謳歌するドン・ジョヴァンニ・・・

「香り」は女性だけのものではありません。快楽を一途に追究し妥協を許さなかった剛直なドン・ジョヴァンニのオーラと強烈なフェロモンは女性のみならず男性をも魅了します・・・そして館を去る時に騎士長の石像と直面したエルヴィラの絶叫から音楽は一気にカタストロフに向かって雪崩を打って行きます。

地獄落ちの場面の凄絶を極めた音楽は素晴らしいものですが、私はその前のエルヴィラ、ドン・ジョヴァンニ、レポレロの三者三様の思いが重層し交錯する場面に魅了されます。人間の深層心理を見事に表現した「神ってるモーツァルト」の真骨頂です。

また、アロイジアのために作曲したコンサート・アリア、特に「テッサリアの民よ／私は求めはいたしません。不滅の神々よ」K. 316 や、「ああ、情深い星々よ、もし天に」K. 538 等に漲る悲痛なまでの叫びには劇中人物を越えてモーツァルト自身の恋人への思いの深さが感じられます。最早「色香」を超越して心象世界に転位していると言わざる

を得ません。

「私は神とモーツァルトを、そしてベートーヴェンを信じる。彼の『ドン・ジョヴァンニ』をみたまえ！ いったいどこで音楽は、このようにきわめて豊かで、明確な個性をえたのだろうか」（リヒャルト・ワーグナー）／（冬樹社刊『モーツァルト事典』・高橋英郎編「モーツァルト頌」より）



楽屋口から (5)

ピアノは妥協の楽器

K.191 白石 孝

些か衝撃的なタイトルだが事実だから仕方がない。美しい音を紡ぎだすべく書かれた譜面は、美しい音で演奏しなくてはいけない。当たり前のことだが。

これを実現するためオーケストラやコーラスでは徹底的に純正調で演奏するようにトレーニングされる。だからあのアヴェ・ヴェルム・コルプスもよくトレーニングされた団体の演奏はすこぶる美しい。

もしこれをピアノで演奏すると澄んだ音は濁り幻滅することは必至である。

でもラベルやドビッシューのピアノ曲は大変、美しいではないかとの反論が出そう。答えは「濁る音は避けて作曲」しているのである。ピアノ（に限らず鍵盤楽器、ハープなど）は何調に転調しても大きく破綻することが無いように平均律で調律している。

オクターブには12音あるので右隣の鍵は「2の十二乗根倍」（1.059463倍）の周波数の音となるように調律。

でも音が心地よく協和するには音の波の数が1:2、2:3、3:4、4:5のように整数倍の関係で合う必要がある。

ド・ミ・ソの長三和音の場合、根音である「ド」

を基準にすると第5音の「ソ」はピアノのソの音より約2セント高く第3音の「ミ」はピアノのミの音より約13セント低くしないと波はきちんと協和しない。（セントとは半音を百等分した単位。）

更に言うところの第3音は根音に対して音量を1/3くらいで演奏すると大変美しく聞こえる。

ここでこんな疑問が出そう。弦楽器は弦を押さえる位置を調節すれば音程の調節ができることは判る。でも管楽器は音程の調節なんてできるの？

答えは「容易にできる」である。吹き込む息のスピード・圧力、唇による微調などでプラス・マイナス20セントくらいはどの楽器でも可能である。

このきちんと音の波が協和した音（純正調）とピアノの音（平均律）の違いを体感したい方は次の方法をお勧めする。

必要なものはモーツァルトの管楽器のためのセレナーデ変ホ長調K375の音源と再生装置、ならびにピアノ。ただしセレナーデは、より美しい音が聴きたければプロ中のプロの演奏でなくてはならないが。（注1）

セレナーデK375の冒頭4小節の譜面を示す。

この中には変ホの長三和音E s - G - B以外の音は1音たりともない。（ホルンとクラリネットは移調楽器であるため譜面と実音が異なる）

根音のE sを吹いているのはホルンII、オーパーI、クラリネットI、バスーンのI・II第3音のGを吹いているのはオーパーII、クラリネットII

第5音のBを吹いているのはホルンI
最初の2小節はすべて上記の音で3小節目と
4小節目でバスーンのI・IIがE s - G - B
- Gを繰り返す。

まず譜面を見ながら（見なくてもよいが）音
源を再生して聴いてほしい。

次にピアノで真ん中のE s - G - Bを右手
で、2オクターブ下のE s - G - Bを左手で
叩いてみる。

（1, 2小節は音の動きが無いのでいとも簡
単。3, 4小節は左手を同時に叩くのではな
く1拍ずつE s・G・B・G・E s・G・B
・G・E sと、これもそれぞれの指は同じと
ころに留まっているのでそう難しい話ではな
い。）この管楽アンサンブルの音源とピアノ
の音の差に驚くと思う。

もう一つ実験を。

第3音のGを抜いた音を叩いてみる。すなわ
ち両手ともE sとB（専門用語では空5度）
を。そうすると先ほどの音よりは透明な音に
なることが感じられるはずである。

（但しピアノが正しく調律されていればとい
う条件はあるが。）

ピアノを小さい時からやっている人は「和音
というのはこういうものだ」ということが叩
き込まれているから平気なんだろう。

でも純正調がかくも美しいのか、を知ってし
まった者にとってはピアノの音は汚く聞こえ
てしまうのである。

素朴な疑問：バロック時代の「平均律クラ
フィア曲集」などの『平均律』は誰がつけた？
ご存知の方はご教示願いたい。ツウではない
ため知らないし調べる気も起らないので。
当時は室内楽などでは使う楽器の指定がない
ものが多かった。その音域が演奏できるなら
ヴァイオリンでもフルートでもオーボエでも
構わない。

またクラフィアというから鍵盤楽器を意図し
た曲であることは間違いないだろう。でも当
時は転調する範囲が限られている場合は今日

の平均律ではなく肝心なところがちょっとで
も美しく響くように調律することも行われて
いたそうだ。

前回のクイズの答え

ブラッチェ：ビオラ

パウケン：ティンパニ

ポザウネ：トロンボーン

（注1）

例えばヨーロッパ室内管弦楽団の管楽器奏者
によるテルデック2 2 9 2 - 4 6 4 7 2 - 2
という管楽ディベルティメント全集にある演
奏。

同じテルデックレーベルでもアーノンクール
が指揮している演奏8. 4 3 0 9 7は例によ
り衝撃的過ぎてこの比較目的にはあまりお勧
めできない。

（つづく）

My Favorite Mozart

私のお気に入りのモーツァルト

ピアノ 協奏曲 第22番 変ホ長調 K.482

K.294 藤田 真人

私の K.482 のお気に入り、第3楽章の中間
部で、バックのオーケストラが休止し木管の
和音とピアノソロが美しいメロディーを奏で
る部分です。

片手でも弾ける単純、でも美しいメロディー
・・・

この部分を聴いていると、子供の頃、田舎の
実家へ帰ったときに見た田んぼの中に立って
いる、一本の満開の桜の木から花びらがひら
ひらと舞い散る風景を思い出します。

（今日はバレンボイム・イギリス室内管弦楽
盤を聴いています）

モーツァルトの曲を聴いているとザルツブル
グの美しい景色やヨーロッパのお城や宮殿な

どを思いおこしますが、なぜか、この曲のこの部分では日本の田舎の美しい風景が思い浮かびます。

メロディーがなんとなく文部省唱歌の「春の小川」に感じが似ているような気がしますし、「らーらら」と簡単に口ずさむこともできるので、鼻歌で歌ってしまうこともあります。新しい K.482 の CD を買ってくると、この部分をピアニストと指揮者がどのように表現するか、いつも楽しみにして聴いています。

バレンボイムの K.482 第 3 楽章を聴きながら

・・・



この世の別れに

K.378 乗松 昭

素朴な愛の讃歌

魔笛『パミーナとパパゲーノの二重唱』

天上より舞い降りる至福の楽の音

挽歌（ヴェスペレ） K.339 『ラウダーテ・ドミヌム（主を誉め讃えよ）』

天上へ舞い上がる清澄な祈り

モテット『アヴェ・ヴェルム・コルプス』

永遠の恋人

ウォルフガング・アマデウス・モーツァルト

峻厳な祈り

平均率クラヴィーア曲集

『第 1 巻第 2 2 曲前奏曲とフーガ』

崇高な祈り

管弦楽組曲『第 3 番第 2 曲アリア』

至高な祈り

オルガン・コラール『われ汝の御座の前に進みいで』

永遠の父

ヨハン・セバスティアン・バッハ

* * *

平野啓一郎著『葬送』を読んで



K515 Y. H.

平野啓一郎著『葬送』文庫本全 4 巻、先月やっと読み終えました。ショパン、サンド、ドラクロワを中心とした芸術家小説、当時のフランス二月革命やヨーロッパの政治情勢も織り交ぜながら物語は進んでいきます。当初、ドラクロワとその関係者との芸術論は退屈で退屈で、その上、ヨーロッパの石畳のような硬質な文章には馴染めず、数回挫折して他の本に移りながらも、やはり最後まで読み通したいという強い執念に訴えかけながら読み進めていきました。ドラクロワ宅やショパンのアパートを訪れてくる友人たちとの会話にはモーツァルトやベートーヴェンも頻繁に登場してきます。モーツァルト賛歌があり、ショパンの時代にもモーツァルトの重要性を垣間見ることができます。ショパンが友人のフランショームと企画したコンサートでは、モーツァルトピアノ三重奏ホ長調が演奏されました。貴族のような出で立ち、オーデコロンの香りのするショパンが奏でるモーツァルトはどんなふうだったのかしら、想像力を最大限に膨らましながらか空想の演奏会を楽しみました。

小説の軸となっているのは、ショパンの人生におけるサンドとその子供たちの存在です。ショパンと子供たちとの確執、サンドの娘婿の膨大な借金、その借金返済のために娘の持参金目的に結婚をしたこと、ショパンの

石膏の手、デスマスク、墓石がその娘婿、彫刻家のクレザンジュの手によるものであることを初めてこの本で知りました。最期の息を引き取る際にサンドが現れるのかどうか、最後の最後まで目を離せませんでした。ショパンが自分の葬送に選曲したのはモーツァルトのレクイエムです。葬儀が取り行われたマドレーヌ寺院や終焉の地、ヴァンドーム広場の元アパートには20年以上も前に訪れている私ですが、次回のパリ訪問はショパンをぐっと身近に感じながらの散策となることでしょう。ポーランド人としての矜持を生涯貫き通したショパン。彼の音楽に触れる度に彼の繊細さ、ひたむきさ、プライド、時には頑固一徹さが彷彿としてきて、以前の数倍も生身のショパンを感じるようになりました。辻井伸行の演奏がお気に入りです。

そして今、最初のページからまた丁寧に読み直しています。……平野啓一郎、感動の描写場面「ショパンは、一頃多くの青年達が真似をした有名な山羊革の白い手袋を脱いで、その脱いだ手袋以上に白い手で、それを無造作に卓の上に置いた。…男女を問わず、誰もがその手に憧れた。支那の竹細工のようにしなやかな、節の膨らんだ細く長い指。肉の薄い甲。少し平らになった指先とその平らになった分だけ短くなった艶々しい爪。謐々たる生命の行き交いが時に葉脈をさえ連想させる血管。薄く覆った金色の産毛。そして、和音を押さえる鍵の凹凸しながらに波打つ骨の浮き立ち」……たまりませんねえ、ほれぼれしちゃいます。平野啓一郎の大ファンになりました。知人にこの本について語ると、辻井伸行のショパン、ピアノソナタ第2番が返ってきました。この曲以外はありえないと思うほどこの小説にマッチしています。オーデコロンはショパンに首っ丈の今日この頃です。この後は『マチネの終わりに』が待っています。文学仲間の岡美枝子さんが薦めてくれました。楽しみ楽しみ…。(2018.2.25)

当時の Fl、Harp は～～～



真に不完全な楽器だったのです

K.545 森下 英子

私は2月に東響の二つのモーツァルト、10日の光が丘 IMA ホール 30 周年記念—ピアノ協奏曲 20 番ニ短調 K.466 他 指揮大野剛史、ピアノ岡田奏。20 日の池袋（都芸フェスティバル）フルート、ハープと管弦楽のための協奏曲 ハ長調 K.299 他 指揮ロッセン・ゲルゴフ フルート高木綾子 ハープ吉野直子。

どちらも大感動の演奏でした。私は 20 日に戴いたプログラムで真嶋雄大さんのずばり明快な解説に出逢うことができました。

モーツァルトのフルート大嫌い伝説について、私の中ではド・ジャンからの受注 10 曲に半分しか渡せなかったとのこと。手紙の都度、曲数がまちまちでお父さんは激怒。苦しい言い訳の返信にモーツァルトは「それに、ご存じの通り、僕は我慢出来ない楽器のために書かなくてはならない時は、いつも忽ち気が乗らなくなります。」と書いていることで、以後解説者たちを混乱させて来た、とありました。私は“我慢出来ない楽器”が問題であったことにピンと来ないで、——（美しい作品が今と同じフルートを使いながら作られたと思いついていました！）苦し紛れに咄嗟の出任せの言い訳と。でも本当はフルート大好きと。

それが、真嶋さんの解説では『フルートもハープもモーツァルトは毛嫌いしていた。フルートはテオドール・ベームが楽器機構改革を施すまでは、管に穴を開けただけの形状で、ハープは半音階を自由に駆使できるアクションがまだ備え付けておらず、つまりは極めて音程が不安定だった。』と。（ザスロー事典のフルート担当の R.H 氏は、それは周知常識のこととして記述されなかったのでしょうか。）

知らぬは私ひとりなり。アマデウス通信 47号に私は事実と異なる不十分な投稿をいたし、申し訳ありません。真嶋さんは、K.299はお父さんに早くパリに向かうよう叱責されて旧知のグリム男爵を頼って、ド・ギーヌ公爵を紹介され、アマチュアながらフルートの名手で娘さんのハープとの共演を希ってモーツァルトに委嘱。性能まだ不完全だったフルートとハープに向かって、一旦作曲を始めると、たちまち不完全な楽器からはあるべき美しい音色がモーツァルトの心、頭に溢れて、もう夢中になって喜びいっぱい天上の音楽が作り上げられたことでしょう。真嶋さんは『当時はまだ楽器としての性能が不完全だったフルートとハープというマイナス要素を抱えながら、それでもなおお至って美しい作品に昇華させたモーツァルトの才能には脱帽するしかない。』と結ばれていました。そして先日、NHK ベスト・オブ・クラシックでルツェルン音楽祭でのゴールウェイの K.314 偶然聴けまして、その中頃に一瞬ウンと思うときがあって、これは朝吹代表がアマデウス通信にお書き下さっておられる“神ってる”は演奏にも在るのだと思いました。

モーツァルトを愛する演奏家方の大変なご精進と楽器技術者方のたゆまぬ努力とその他多くの方のおかげで、モーツァルトが思い描いたとおりの素晴らしい音楽を今私たちは聴かせて頂いています。正に朝吹代表がアマデウス通信 48 号で、11 月の勝間田さんの個展から帰られ直ちに作られました 15 句の中の『冬満月時空を超えて今ここに』は、このことにも、と存じました。

——私はザスロー事典の発行所・音楽之友社に次の増刷のとき、R.H 氏の 196 頁の所に（訳者註）として（初心者向けに）当時のフルート、ハープはまだ不完全で音程が不安定であったことをぜひ書き加えて頂きたいことをハガキで要望したいと思います。（事典のあとがきに監訳の森泰彦さんが「遠慮なく出版者に連絡下さい。」と記して下さいいま

すので。）

モーツァルトのミステリーが一つ解決しまして、フルートとハープの曲は一段と味わいが深まって、とても嬉しいです。



モーツァルト「夕べの想い」K.523 を巡って

K.377 草壁 孝也

1 年前になりますが、会員の神谷昌孝氏から紹介された田村和紀夫氏の Facebook (2017.6.25) の記事 (モーツァルトの歌曲「夕べの想い」について) が気になり、田村氏推薦の白井光子さんの CD (Mozart-21 LEADER) を神谷氏からお借りして一はるか昔の青春時代にドイツ・リートに聴き惚れていた自分を思い起こしながら一この素晴らしい歌唱に心が動かされました。白井光子さんとの出会いは初めてのことで、ドイツ滞在が長かったこのメゾソプラノ歌手とハルトムート・ヘル (元夫) とのデュオを世界最高の音楽家夫婦、とエリーザベト・シュワルツコップは賞賛したということです。

この機会に大好きな「夕べの想い」を沢山の音源で聴きまくり、専門家の田村和紀夫氏の言わんとしているところ (参照 1) は理解しつつも、私なりの聴き方はやや違って、素人は素人なりの感覚で聴くのが良いと思えてきました。「事典」の解説 (参照 2) と独和対訳 (参照 3 森下未知世の解説付き) を見ながら、いくつか聴かれて、読者のご感想を寄せていただければ幸いです。

神谷氏所蔵の白井光子、私の持っているバーバラ・ボニー、シュワルツコップに加え、you tube で補いました。下記は you tube のリスト : Arleen Auger(s), Irwin Gage(p) : Elly Ameling, (s) Dalton Baldwin(p) / Ruth Ziesak (s)

UlrichEisenlohr(P)/ElisabethSchwarzkopf(S)/WalterGiesecking(p)/Barbara

Bonney(s)GeoffreyParsons(p)/MitsukoShirai(ms)HartmutHöl(p)/MagdalenaKožená (S),Karel Košárek (p)

私的には、白井光子のメゾが、抑揚に富んだ、この詩情をよく表現したベストと思う。ソプラノでは、好みから言えば、アメリングであろうか。オジェーやツイザークも好き。シュワルツコップのあまりにも透明できれいな声に圧倒されるのであるが、生死の間をさまよう詩には不向きなのでしょうか。この曲はメゾの白井に軍配を上げたい。リートにおいて伴奏も大事ですがここでは論じません。

田村氏の言わんとしていることもわからないではないが、また3連から4連に入るところの変化は大きいのであるが、前半の3連と後半の3連をバッサリ分ける考え方は詩の読み方を誤ってしまう。各連の中にも転調あり、抑揚在りで、そこに伴奏が淡々と繰り返す。最後のところは冒頭の伴奏が繰り返される。どうあれ通作歌曲形式は全体の流れで聴くべきであり、参照2の「事典」の解説はこの曲の特徴をよく表している。*詩中の人称変化を見ると、1連：.人生の移ろい、2.連；私たちと友人たち、3.連；私、4.連；あなた方と私、5と.6連；君（d u）と私に・・・この心象変化する流れを感じる事が大切かと思えます。

（参照 1）神谷氏からの紹介：田村和紀夫氏の facebook（6/25、2017）；

外から内への通路 —モーツァルト 歌曲「夕べの想い」の3度転調： 「光の国への旅立ち」の転調として、3度転調があります。詩は6つのスタンザ（連）からなり、内容的には、前半3つと後半3つでわかれます。前半は、夕暮れに人生を想い、やがて舞台に幕が下り、この巡礼の旅を終えるという感慨を歌います。それに対して、後半は、もしわたしが墓の中で眠ったら、どうかわたしのために涙を流してほしいというのです。前半は客観

的な「観照」、後半は主観的な「願望」です。外から内への転換。これをどう繋ぐか。モーツァルトはここで3度「落とした」のです（譜例）。ト短調から変ホ長調。ここをどう歌うか。やはり決め手は声の色でしょう。人生への厳しい眼差しを向けた前半と、どうかわたしのために泣くことをためらわないで、と願う後半は、声色が違うはずなのです。厳粛な声と、思いが溢れる声です。そんな風に歌った例があるか、少しばかり聴き漁ったことがあります。シュワルツコップなら.....残念ながら、2種類のCDはそれほどでもありませんでした。でも、いくつか聴いて、出会ったのです。白井光子さんの歌唱でした。前半を抑えめにし、古典的節度を保った中での、ニュアンスの変化が素晴らしい。こうでなくっちゃ！

（参照 2）海老澤敏ほか編「モーツァルト事典」の解説（藤本一子）の断片

・・・ここには詩全体を通して死と生をめぐる諦念ともいべき感情が流れている・・・6節の詩は通して作曲され、それぞれの節において次々にあたらしい旋律が与えられている・・・そしてなめらかではあるが、頻繁に転調が繰り返され、生がうつろいやすいものであることが、音楽によって現実化される。しかしそれらにあってなお、全体が常に一つの情調に基づいていることを強く感じさせるのが、伴奏音型、ことに前奏の音型の統一的な使用である。これはあたかも回帰主題のように随所に現れる。強い調子でともに語りかける箇所において、時間が断ち切られる印象をうけるにもかかわらず〈おお、友よ〉、この伴奏音楽が現れるや、私達は全体を覆っている、たゆたうような感情に戻される。・・・この曲は、モーツァルトが、父レオポルドを亡くして間もない時期に作曲したものである。父を天に送り、どのような思いでこの曲を書いたことだろうか。

（参照 3）森下未知世「Mozart con grazia」；久元祐子ほか多くの人が活用しているとい

う。

<http://www.marimo.or.jp/~chez/mozart/> その中から k 523 の解説、独和対訳、CD の紹介は参考になる：下記

<http://www.marimo.or.jp/~chez/mozart/op5/k523.html>

(独和対訳：西野茂雄訳)

Abend ist's, die Sonne ist verschwunden
und der Mond strahlt Silberglanz
so entflieh'n des Lebens schönste Stunden
fliehn vorüber wie im Tanz.

はや一日が暮れ、太陽は沈んで
月が銀色の光を投げかけています。
人生の最良の時もこんな風に過ぎ去ってゆく
のです、
ダンスに夢中になっていた間に、とでもいった
風に。

Bald entflieht des Lebens bunte Szene
und der Vorhang rollt herab
aus ist unser Spielfeld des Freundes Träne
fließet schon auf unser Grab.

人生の様々な場面はまもなく消え失せ
舞台には幕が降ろされます。
私たちの芝居もこれでおしまい！そして友人
達の涙が
はや、私たちの墓に降りそそぐという寸法で
す。

Bald vielleicht (mir weht, wie Westwind leise,
eine stille Ahnung zu)
schließ'ich dieses Lebens Pilgerreise,
fliege in das Land der Ruh'.
たぶんもうすぐ(ほのかな西風のように
ひそやかな予感が私に吹き寄せてくるので
す)

私はこの世の巡礼の旅を終わって
いこいの国にとび去るでしょう。
Werd' ihr dann meinem Grabe weinen
trauernd meine Asche sehn
dann, o Freunde, will ich euch erscheinen
und will Himmel auf euch weh'n.
その時、あなた方が私の墓の前で泣き

悲しみに暮れて私の灰を見つめるなら
私はあなた方の前に姿をあらわし
風に舞い立ってあなた方に吹きつけましょ
う。

Schenk' auch du ein Tränchen mir und pflücke
mir ein Veilchen auf mein Grab
und mit deinem seelenvollen Blicke
sieh' dann sanft auf mich herab.

あなたもまた、ひとしずくの涙を私に贈り
一本のすみれを摘んで私の墓に手向け
あなたの心のこもったまなざしで

「自由学園明日館のこと」



K581 広瀬 哲哉

5月の連休直後に、2019年度以降のモーツァルト愛好会例会の会場候補の一つとして、池袋の自由学園明日館(みょうにちかん)の講堂を、朝吹代表と共に下見して来ました。池袋駅からほど近い住宅街を少し入ったところにある、自由学園明日館と言う建物は、1921年(大正10年)、羽仁吉一・もと子夫妻創立の自由学園の校舎として、巨匠フランク・ロイド・ライトの設計により建設されました。1934年(昭和9年)に自由学園が南沢(東久留米市)に移転してからは、明日館は主として卒業生の事業活動に利用されて来ましたが、その後、その歴史的・芸術的価値が評価され、1997年(平成9年)5月、国の重要文化財指定を受けました。建物の中には、定員272名の講堂もあり、それが、今回の下見の対象です。

その講堂では、これまでモーツァルト愛好会例会が何度か開かれ、一番の直近は2013年4月の例会でしたが、実はその例会こそが、小

生が最初に参加した愛好会例会でしたので、思い出深いものがあります。その後、耐震補強工事が行われ、昨年9月から、ホールとしての貸出が再開された、その再開記念コンサートでは、(昨年9月の例会に出演いただいた)矢口里菜子さんが、卒業生として、チェロ演奏をされたそうで、ここにもご縁がありました(矢口さんは、付属高校を経て東京藝大卒業ですが、その前に自由学園に通っておられました。なお、矢口さんは今年8月のヴァイオリンの土屋杏子さんとの例会にも再び出演されます)。

さて、明日館講堂の中ですが、1階の真ん中に160席、左右にそれぞれ36席ずつの計232席、これに2階の40席が加わり、全部で272席と、いつも使っている光が丘美術館(定員140人)のほぼ2倍の収容人員を誇ります。たまたま、最近購入されたばかりのヤマハC7Xを試弾されている方がいたので、客席のあちこちで聴かせてもらいましたが、音響的には全く問題なく、また、どちらかと言うと2階の席の方が、響きが良いように感じました。

舞台裏手2階にある楽屋には、骨董品と見間違えるテーブルやイスがいくつも置いてあり、トイレも講堂を出た外にあるなど、近代的なホールとはだいぶ趣が異なりますが、逆に、それこそ、ヨーロッパの教会などの古い建物で音楽を聴くのと同じ雰囲気味わえるので、会員の皆さんにもきっと喜んでいただけるものと確信しました。

前回のアマデウス通信でもお伝えしましたように、土日での会場予約がうまく出来るかどうかと言う高いハードルがあるのですが、もううまく予約出来れば、多くの、会員以外の方々(臨時会員)にも来ていただけるよう、質の高い演奏家の方々を見つけ出す努力もしたいと思っています。明日館での例会が実現した場合、どうか、お友達もお誘い合わせの上、お越してください。2階の40席が狙い目ですよ。

(以下は自由学園明日館ホームページ <http://www.jiyu.jp/>の説明からの補足です)空間を連続させて一体構造とする設計は、枠組壁式構法(2x4構法)の先駆けとの見方もあります。木造で漆喰塗の建物は、中央棟を中心に、左右に伸びた東教室棟、西教室棟を厳密なシンメトリーに配しており、ライトの第一期黄金時代の作風にみられる、高さを抑えた、地を這うような佇まいを特徴としています。プレイリースタイル(草原様式)と呼ばれるそれは、彼の出身地・ウィスコンシンの大草原から着想を得たもので、池袋の界限に開放的な空間を演出しています。道路を隔てた南西には、272人収容できる遠藤新設計の講堂がならび、重要文化財・自由学園明日館は構成されています。

*



▽次号で『アマデウス通信』が50号に達します。それを記念する特集「私の好きなモーツァルト・ベスト10」のアンケートをお願いします。6月例会での提出か6月末締切の遵守をお願いします。回収率を上げるため、催促の連絡網を考えています。▽10曲選ぶのは大変ですが、ジャンル別に1曲選べばビギナーでもすぐ10曲になります。通の人だと20-30曲になって、絞り込みの方が大変になるでしょう。▽よく聴くのが好きな曲だと言われますが、私はしょっちゅう聴くと感激が薄れるので、滅多にしか聴かないことにしています。CDを虫干しのように久しぶりに取り出すと、張り切っていい音を響かせてくれます。ジャンル別に聴き直すと、気が付かなかったいい曲に出逢います。ピアノ・ソナタ第2番第2楽章でそう感じました。この機会をチャンスとして、みなさんに新発見、再発見があって、モーツァルト愛好が一層深まることを願います。

(ガーディナー・イズミ)